

# 那珂 36

— 那珂遺跡群第86次調査報告 —

2004

福岡市教育委員会

# 那 珂 36

－那珂遺跡群第86次調査報告－



遺跡略号 NAK-86  
調査番号 0248

2004

福岡市教育委員会



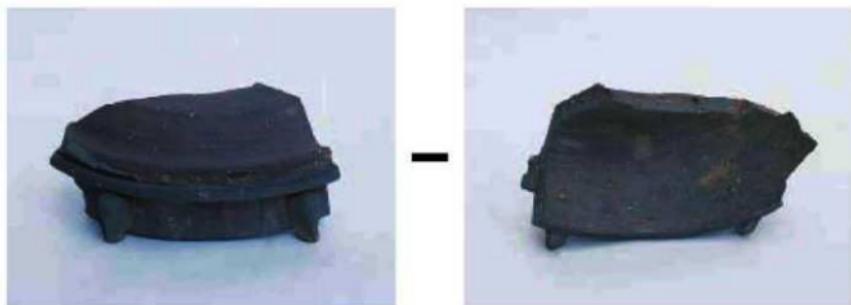
卷頭写真1 調査区東半部全景（西から）



卷頭写真2 調査区西半部全景（西から）



卷頭写真3 SC008蓋（東から）



卷頭写真4 SD013出土硯

## 序

玄界灘に面して広がる福岡市には豊かな歴史と自然が残されており、これを後世に伝えていくことは現代に生きる我々の重要な努めであります。

福岡市教育委員会では開発事業に伴い、やむをえず失われていく埋蔵文化財については事前に発掘調査を実施し、記録保存に努めています。

今回報告する那珂遺跡群第86次調査においても発掘調査により多くの貴重な成果をあげることができました。

本書が文化財保護へのご理解と認識を深める一助となり、また研究資料としても活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行にいたるまで廣田真二様をはじめとする関係各位のご理解を賜り、ご協力をいただきましたことに対し厚く御礼申し上げます。

平成16年3月31日  
福岡市教育委員会  
教育長 生田 征生

## 例　　言

1. 本書は福岡市教育委員会が平成14年度に博多区那珂1丁目550番において実施した那珂遺跡群第86次調査の発掘調査報告書である。
2. 遺構の実測は長家伸が行った。
3. 遺物の実測は長家、坂本真一（現福岡県教育委員会）が行った。
4. 製図は長家が行なった。
5. 写真は長家が撮影した。
6. 本書で用いる方位は磁北であり、座標北から $6^{\circ}$ 西偏し、真北から $6^{\circ}18'$ 西偏する。また座標は日本測地系を使用している。
7. 本書で用いる遺構番号は通し番号にし（一部欠番あり）、報告の際には遺構の性格を示す略号を付して表記している。略号は竪穴住居跡（S C）、掘立柱建物（S B）、井戸（S E）、土坑（S K）、溝（S D）、ピット（S P）である。
8. 本書に関わる図面・写真・遺物等の全資料は福岡市埋蔵文化財センターで収蔵・保管されるので、活用いただきたい。
9. 本書の編集・執筆は長家が行った。

遺跡調査番号	0248		遺跡略号	N A K - 86	
所在地	博多区那珂1丁目550番			分布地図番号	37-0085
開発面積	1240.63m <sup>2</sup>	調査対象面積	380.64m <sup>2</sup>	調査面積	370m <sup>2</sup>
調査期間	平成14年12月5日～平成15年2月19日			事前審査番号	14-2-368

## 本文目次

I	はじめに.....	1
1	調査にいたる経過.....	1
2	調査体制.....	1
II	調査の記録.....	5
1	調査の経過.....	5
2	遺構と遺物.....	5
1)	掘立柱建物.....	5
2)	竪穴住居跡.....	9
3)	井戸.....	23
4)	土坑.....	24
5)	溝.....	24
6)	その他の遺物.....	28
7)	小結.....	28

## 挿図目次

第1図	調査区位置図1（1/50000） .....	2
第2図	調査区位置図2（1/4000） .....	3
第3図	調査区位置図3（1/500） .....	4
第4図	調査区全体図（1/100） .....	折り込み
第5図	遺構配置図（1/200） .....	5
第6図	S B011・027及び出土遺物実測図（1/60、1/3） .....	7
第7図	S B028・029及び出土遺物実測図（1/60、1/3） .....	8
第8図	S B030実測図（1/60） .....	9
第9図	S C002及び出土遺物実測図（1/60、1/3、1/1） .....	10
第10図	S C003・004及び出土遺物実測図（1/60、1/30、1/3、1/1） .....	11
第11図	S C005及び出土遺物実測図1（1/60、1/30、1/3） .....	12
第12図	S C005出土遺物実測図2（1/3、1/2） .....	13
第13図	S C006及び出土遺物実測図（1/60、1/30、1/3） .....	14
第14図	S C007及び出土遺物実測図（1/60、1/3） .....	15
第15図	S C008実測図（1/60、1/30） .....	16
第16図	S C008出土遺物実測図（1/3） .....	17
第17図	S C014実測図（1/60、1/30） .....	18
第18図	S C014出土遺物実測図（1/3） .....	19
第19図	S C015実測図（1/60） .....	20
第20図	S C015出土遺物実測図（1/3） .....	21
第21図	S C018及び出土遺物実測図（1/60、1/3） .....	21
第22図	S E001及び出土遺物実測図（1/30、1/3） .....	22
第23図	S K024及び出土遺物実測図（1/20、1/3） .....	23

第24図 S K025及び出土遺物実測図（1/40、1/3）	24
第25図 溝実測図（全体図1/150、断面図1/30）	25
第26図 S D012・013・021・022出土遺物実測図（1/3、1/2）	26
第27図 その他の遺物実測図（1/3、1/1）	27

## 写真目次

卷頭写真1 調査区東半部全景（西から）	写真20 S C008竈検出状況（東から）	33
卷頭写真2 調査区西半部全景（西から）	写真21 S C008竈（東から）	33
卷頭写真3 S C008竈（東から）	写真22 S C008竈（東から）	33
卷頭写真4 S D013出土硯	写真23 S C008竈袖部北側遺物出土状況 (北から)	34
写真1 調査区東半部全景（西から）	写真24 S C008竈1土層	34
写真2 調査区東半部西側（西から）	写真25 S C008竈1土層	34
写真3 調査区西半部全景（西から）	写真26 S C008竈2土層	34
写真4 調査区西半部中央（西から）	写真27 S C008竈2土層	34
写真5 S B011（東から）	写真28 S C008竈2完掘状況（東から）	34
写真6 S B011（南から）	写真29 S C014・015（南西から）	35
写真7 S C002（北から）	写真30 S C014（南東から）	35
写真8 S C002（東から）	写真31 S C014竈土層	35
写真9 S C003（南西から）	写真32 S C014竈内高坏出土状況 (南東から)	35
写真10 S C003竈検出状況（南西から）	写真33 S C014・015（東から）	35
写真11 S C005（南西から）	写真34 S C015壁際ピット周辺（西から）	35
写真12 S C005竈（南西から）	写真35 S C018（東から）	36
写真13 S C005竈土層	写真36 S E001（東から）	36
写真14 S C005竈土層	写真37 S E001遺物出土状況（北から）	
写真15 S C006（西から）	写真38 S K025（南から）	36
写真16 S C006竈（西から）	写真39 S K024（東から）	36
写真17 S C007（東から）	写真40 S D013硯出土状況（北から）	36
写真18 S C007（南から）		
写真19 S C008（南西から）		

## I はじめに

### 1 調査にいたる経過

平成14年9月4日付けで廣田真二氏より福岡市教育委員会宛に福岡市博多区那珂1丁目550番の物件に関して、共同住宅建設に関わる埋蔵文化財事前審査申請書が提出された（事前審査番号14-2-368）。申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である那珂遺跡群（分布地図番号37-0085・遺跡略号N A K）に含まれている地点である。この申請を受けて埋蔵文化財課では申請者と協議の上平成14年10月8日に申請地内の試掘調査を行い、現況地表面から60～100cmほどの鳥栖ローム層上面で堅穴住居跡・ピット等の遺構を確認した。この結果を受けて埋蔵文化財課では申請者に対して遺構が存在する旨の回答を行い、その取り扱いについて協議を行った。その結果、建物の構造上遺構の破壊が避けられないため、平成14年度に発掘調査、平成15年度に資料整理・報告書作成を行い、記録保存を図ることで協議が成立した。なお申請地1240.63m<sup>2</sup>のうち、調査対象としたのは建物建築部分の380.64m<sup>2</sup>で、駐車場として使用される残地に付いては、遺構面まで工事の影響が及ばないため現状保存することとしている。

調査期間は平成14年12月5日～平成15年2月19日である（調査番号0248）。調査面積は370m<sup>2</sup>、遺物はコンテナ20箱分出土している。

現地での発掘調査にあたっては廣田真二様をはじめとする関係の皆様から発掘調査についてご理解頂くと共に、多大なご協力を賜りました。ここに記して謝意を表します。

### 2 調査体制

事業主体 廣田真二

調査主体 福岡市教育委員会埋蔵文化財課

調査総括 埋蔵文課財課長 山崎純男

調査第2係長 田中寿夫

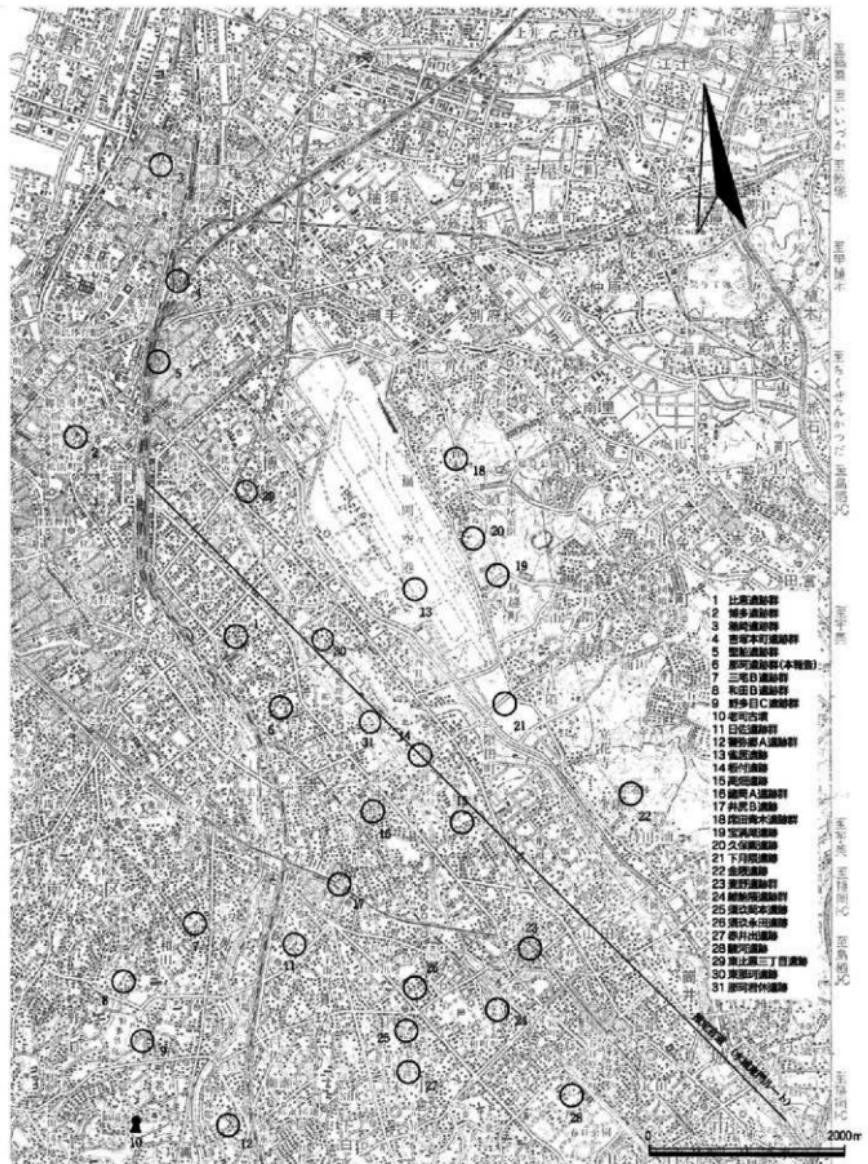
調査庶務 文化財整備課 御手洗清

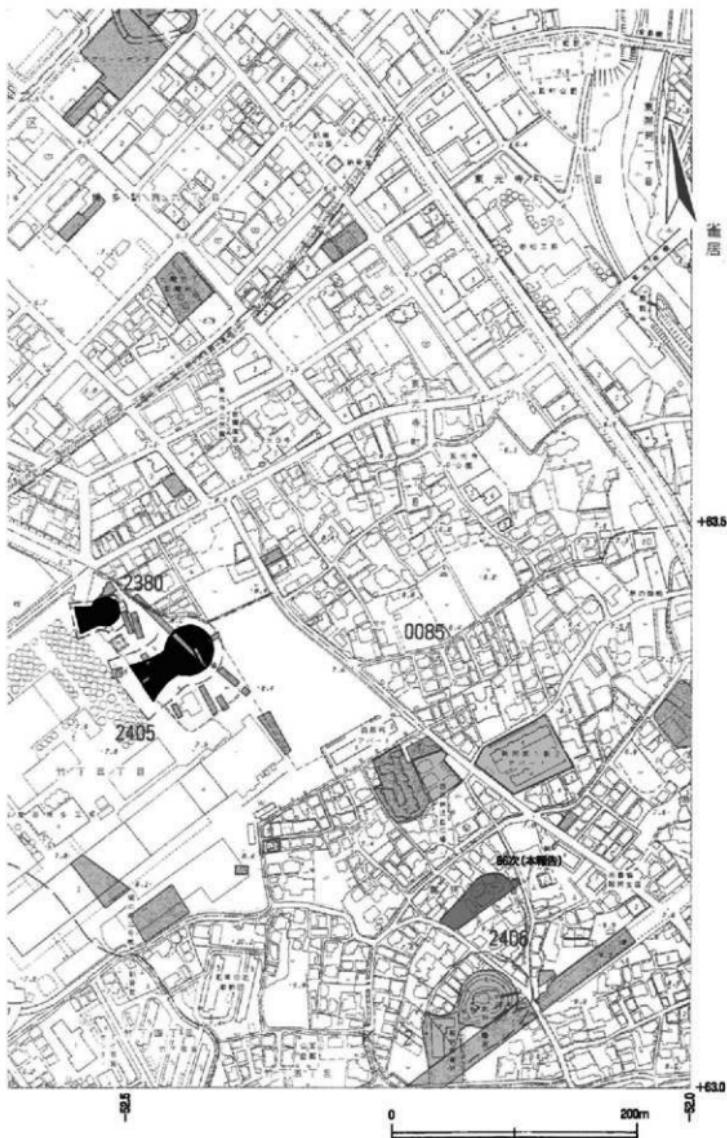
調査担当 調査第2係 長家伸

調査作業 澄川アキヨ 中村フミ子 岩本三重子 越智信孝 藤野トシ子 中村サツエ

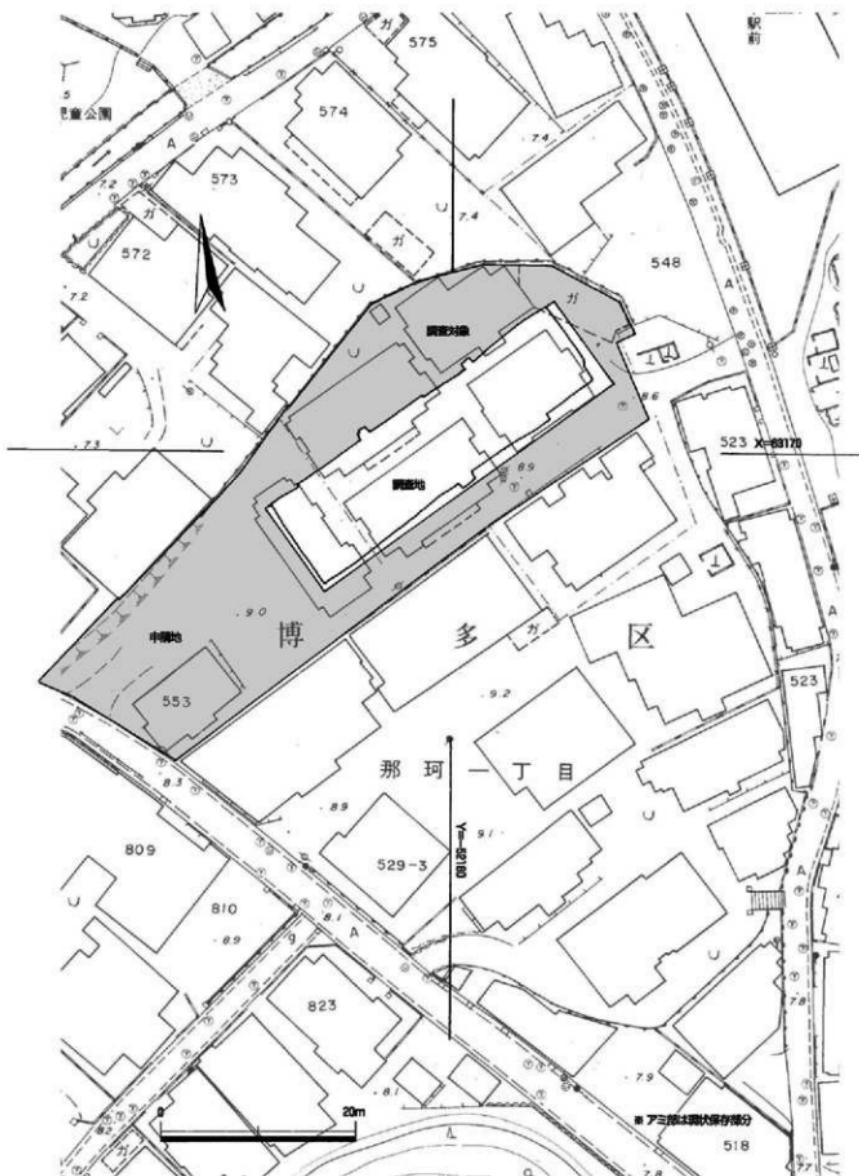
藤野幾志 西川シズ子 宮崎幸子 近藤誠一 桑野孝子 中島道夫 小田裕樹

坂本真一 川下信弘

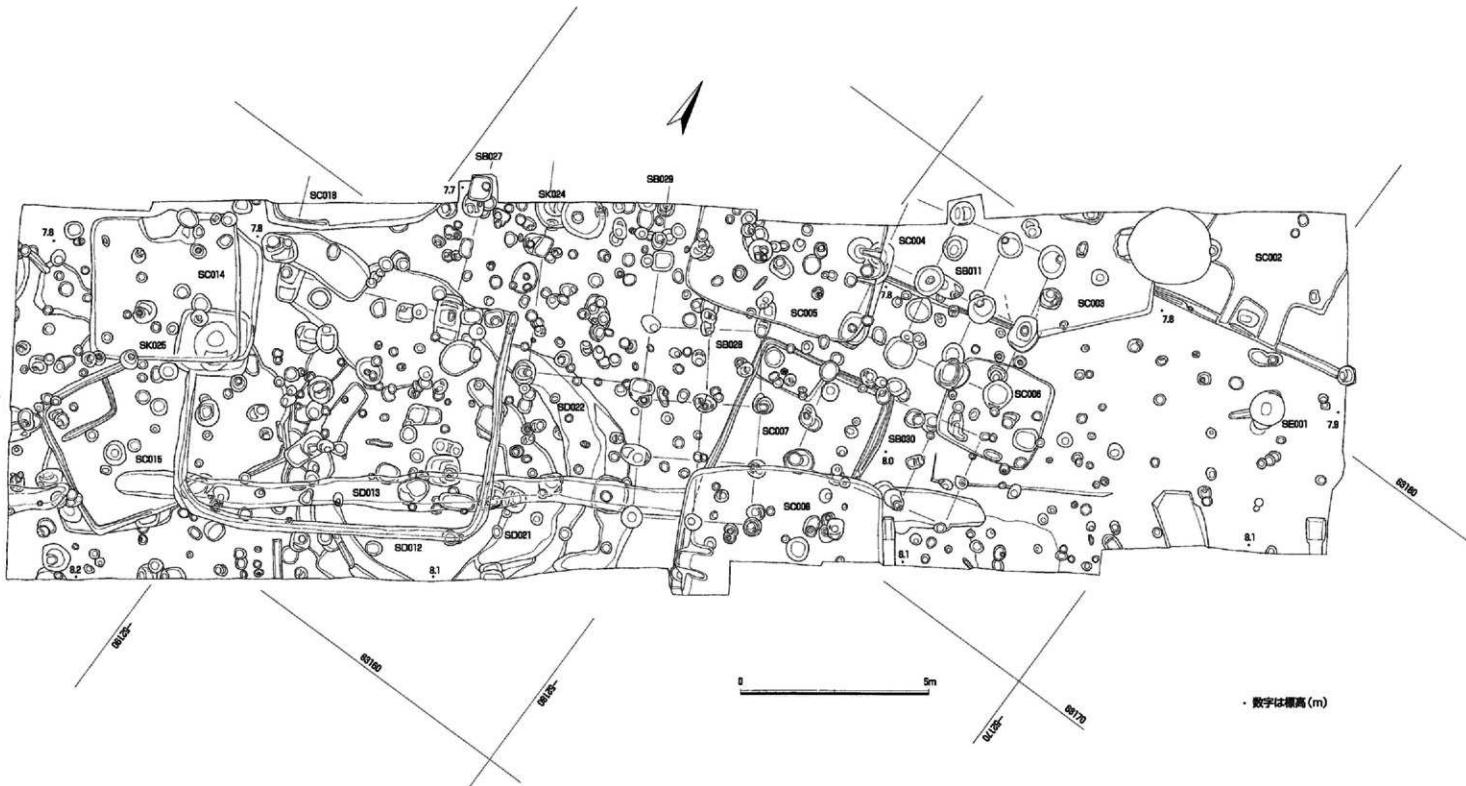




第2図 調査区位置図2 (1/4000)



第3図 調査区位置図3 (1/500)



第4図 調査区全体図 (1/100)

## II 調査の記録

### 1 調査の経過

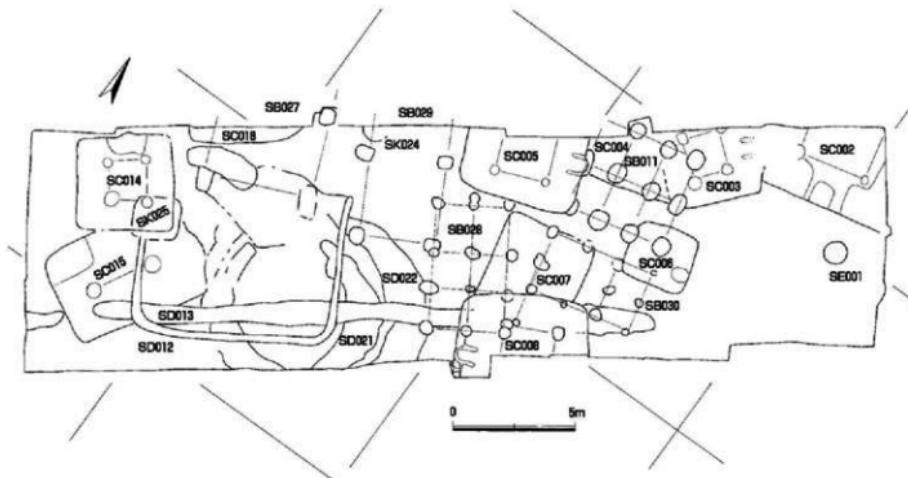
那珂遺跡群は福岡平野の中央部分を北流する那珂川と御笠川に挟まれた洪積丘陵上に立地する遺跡群である。丘陵の基盤層は花崗岩疊層で、この上面に阿蘇噴火火砕流・火山灰である八女粘土層・鳥栖ローム層・新期ローム層が堆積している。北側に隣接する比恵遺跡群とは一連の丘陵上の遺跡群を構成するものと考えられ、その範囲はあわせて南北2.4km、東西1kmに及ぶと考えられる。

今回の調査対象地はこの丘陵のほぼ中央部分に位置する。申請地は調査前には宅地として使用されており、家屋解体後の調査となっている。現況地表面標高は8.8m前後を測る。調査は重機による表土除去から行うこととした。廃土処理の関係上東半部分の調査を行った後、土砂を反転して西半部分の調査を行った。造構面は盛り土除去直下の鳥栖ローム層上面であるが、北側1/3程度には造構面直上に黒褐色土層が10cm程度堆積している。造構面標高は南東隅で8.1m、北東隅で7.8m、南西隅で8.1m、北西隅で7.7mをそれぞれ測る。造構面は全体に南から北に向けて緩やかに傾斜しており、東西方向にはほとんど勾配は認められない。検出造構は掘立柱建物、竪穴住居跡、井戸、溝、土坑、ピットがある。出土遺物は弥生時代中期後半代、古墳時代後半代（小田編年Ⅲ～Ⅳ期）の2時期を中心となり、この他古代～中世前半代の遺物も認められる。

### 2 造構と遺物

#### 1) 掘立柱建物

今回の調査では5棟の掘立柱建物を抽出したが、この他にも掘削深の深いピット、弥生時代中期後半と考えられる黒褐色土埋地で、平面（長）方形を呈するピット等がまとまる部分があるが、建物として結びつけることができていない。また区画状の溝であるSD012内部にも建物の存在が想定でき



第5図 遺構配置図 (1/200)

たが、ここでも拾い上げることができなかった。

#### S B011 (第6図)

調査区東側で検出する。柱のひとつ (S P190) が S C005の竪に切られており、S C004→S B011→S C005の関係となる。主軸方位をN-6°-Wにとる総柱建物である。現状で東西方向3間(4.3m)、南北方向2間(4m)を測るが、北側に更に延びる可能性も考えられる。柱穴埋土はやや茶味を帯びた暗褐色土が主体となる。S B011の南側に隣接する2×3間のS B030もこれと柱筋が通る位置にあり、一連の建物を構成するものと考えられる。小田編年Ⅳ期に位置付けられるが、S C005との関係からその前半代を考えておきたい。

出土遺物(第6図 1~3) 図示したものはいずれも須恵器である。1は壊身であろう。端部を欠く小型品である。2は蓋であろうか。天井部には中程まで回転ヘラ削りを行う。3は甕の口縁部破片である。端部は丸みを帯びて、外方に引き出される。

#### S B027 (第6図)

調査区西側で検出する。主軸方位をN-17°-Wにとる。梁行1間・4.3m、桁行1間以上・3.6m/1間をそれぞれ測る。本調査区の北側で行った8次、69次調査で確認しているような1間×2間の大型の建物と考えられる。南側柱穴(S P348・349)は1.3×0.7mの隅丸長方形を呈し、階段状の掘りを行っている。検出面からの深さは1m程度である。埋土は検出面から平坦面まではロームブロックをほとんど含まない黒褐色土で、これ以下はロームブロックを含む黒褐色土である。更に底面から10cm程度は黒褐色土とロームの1:1混合土となっている。桁行中央のS P357は隅丸方形を呈し、検出面からの深さは50cmである。いずれの柱穴からも上面から柱痕跡は確認できていない。遺物は僅少で詳細は不明瞭であるが、類例等から弥生時代中期後半代に位置付けられる建物と考えておきたい。

出土遺物(第6図 4・5) 4は鏃状を呈する甕口縁部である。上面は外傾している。5は外面が僅かに上げ底状となる底部破片である。肩部外面下端に継刷毛が残っている。また内底面には煤が付着している。

#### S B028 (第7図)

調査区中央部で検出する。主軸方位をN-26°-Wにとる。図上では2×3間の総柱建物としているが、南側2間分は柱間1.6mでほぼ均等であるが、北端柱列は南側列との柱間1.9mとやや異なっており、本来2×2間の総柱建物と北側に付随する柱列という組み合わせになる可能性も考えられる。柱穴は平面径50cm前後の円形を呈し、埋土は上半が褐色土、下半が黒褐色土である。出土遺物には土師器、須恵器があり、小田編年Ⅲb~IV期に位置付けられるものと考えられる。

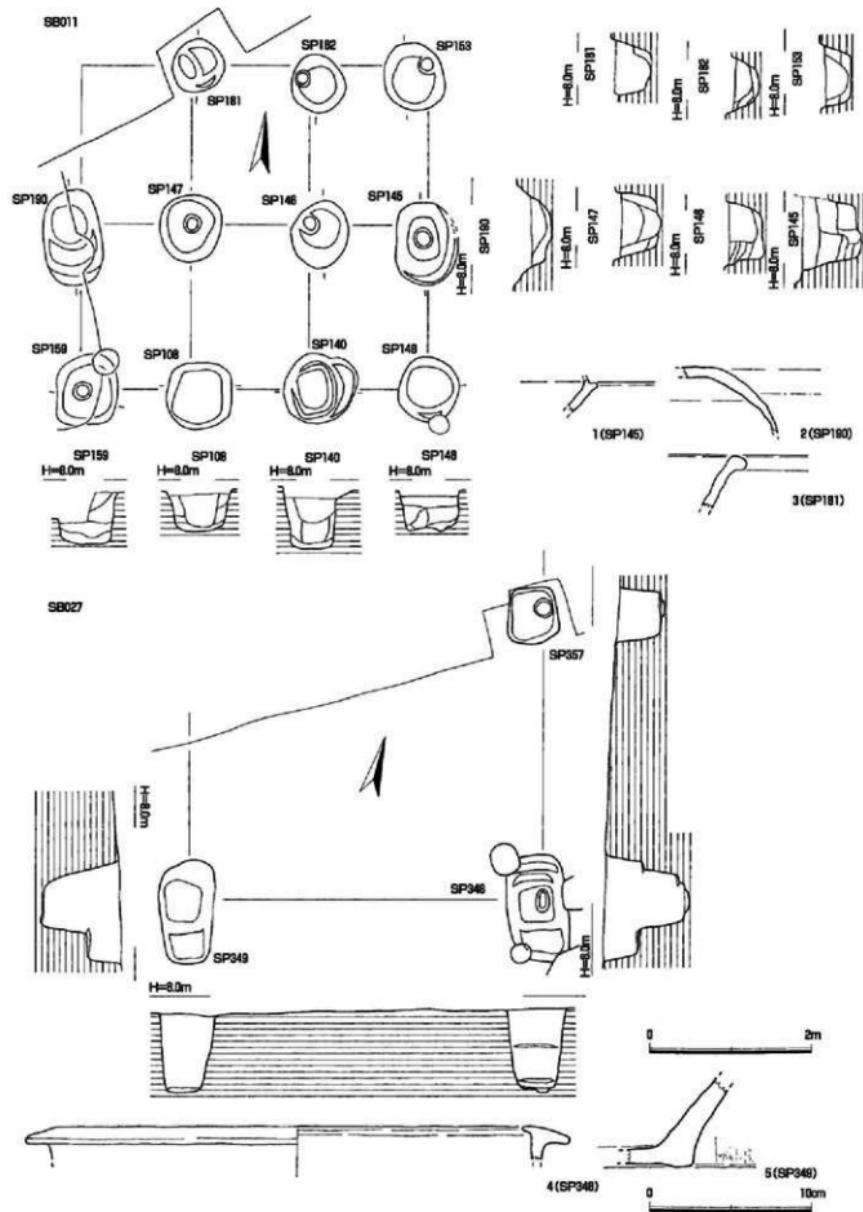
出土遺物(第7図 6・7) 6・7はいずれも端部を欠く須恵器である。外面に回転ヘラ削りを行う蓋であろうか。

#### S B029 (第7図)

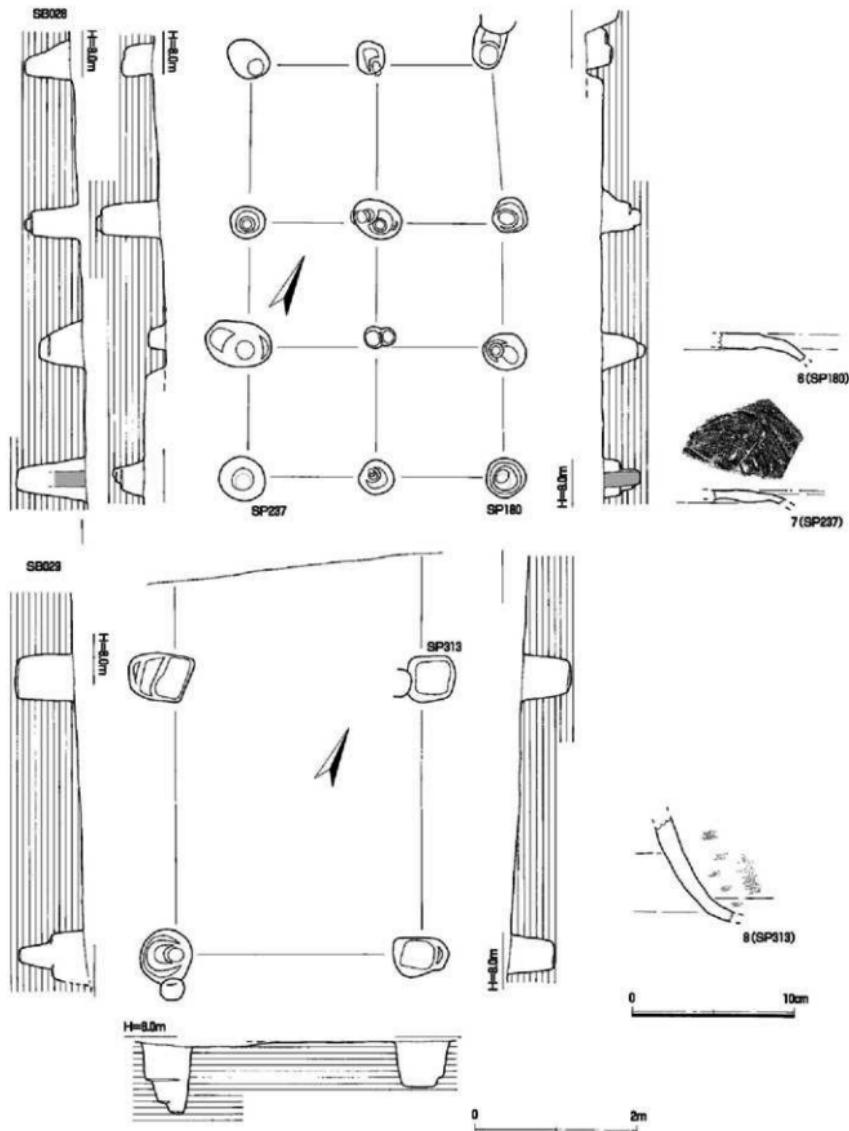
調査区中央部で検出する。主軸方位をN-24°-Wにとる。北側に更に延びるものと考えられるが、S B027で考えられるような1×2間の掘立柱建物であると考えられる。梁行1間・3m、桁行3.4m/1間をそれぞれ測る。柱穴掘り方は(長)方形を基本とする。黒色土を主体とする埋土で、柱痕跡は認められなかった。混入と考えられる青磁1点を除き、弥生土器小破片が出土するのみで時期は不明瞭であるが、埋土土色や形態からS B027に近い弥生時代中期後半が考えられる。

出土遺物(第7図 8) 8は高壊の脚部破片である。内面横ナデを行い、外面には横方向の刷毛目が認められる。

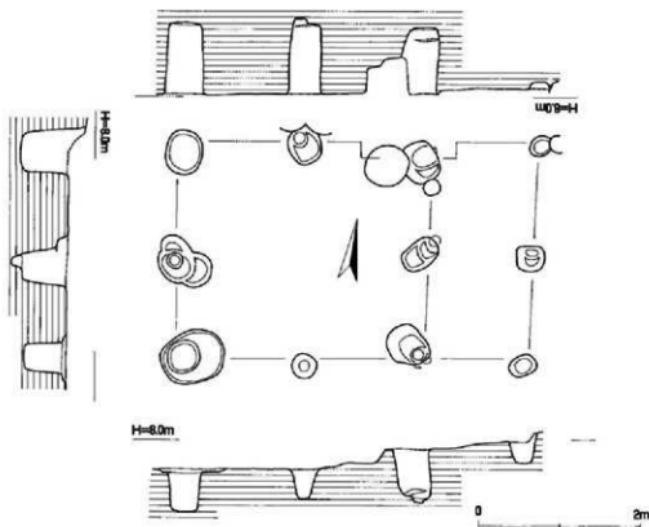
#### S B030 (第8図)



第6図 SB011・027及び出土遺物実測図(1/60、1/3)



第7図 SB028・029及び出土遺物実測図 (1/60、1/3)



第8図 SB 030実測図(1/60)

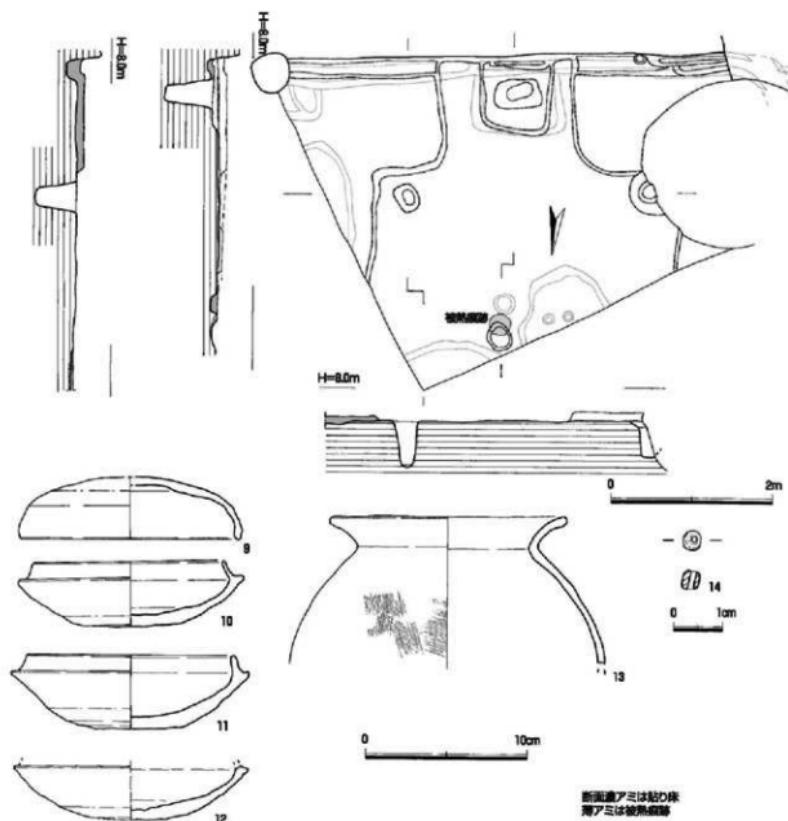
調査区東側で検出する。建物主軸および柱筋をSB 011に合わせる建物である。東側柱列掘削深が浅いため、 $2 \times 2$ 間の側柱建物東側短辺に底状の施設を附設したものと考えておく。建物全体の規模は東西方向4.3m、南北方向2.5~2.7mを測る。位置的な関係からもSB 011と関連を有する一連の建物群を構成するものと考えられる。

## 2) 壁穴住居跡

壁穴住居跡は10棟検出している。時期的には弥生時代後期と古墳時代後期の2時期に分けることができる。

### SC 002(第9図)

調査区東側で検出する。調査区のコーナー部分で確認しているため全体の形状は明らかでないが、一辺6m強の方形に近い平面プランを呈するものと考えられる。床面の四周に高さ5~10cmの盛土によるベッド状造構が巡り、南側中央部分には壁際に方形土坑が認められる。4本主柱と考えられ、床面ほぼ中央には径25cmの被熱痕跡が残っている。この北側にある浅い掘り込み中には炭化物等の混入は認められなかった。住居埋土は黒褐色土で、ベッド全体及び床面の一部に行われている貼り床は暗褐色土と暗黃褐色土の1:1の混合土による。出土遺物のうち床面中央部において、床面から僅かに浮いた状態で完形に近い須恵器が数個体まとめて出土しているが、ベッド部分上層から出土する遺物は弥生時代中期後半~後期のものが大半である。遺物の多くは弥生時代のものであり、住居形態等からも古墳時代後期とは考えにくい。平面及び北側壁面土層等でも切り合い関係は認められず、可能性は留保しておきたいが、一応須恵器については後世の造構に扱るものと考えておきたい。住居の時期は弥生時代後期のものであろう。

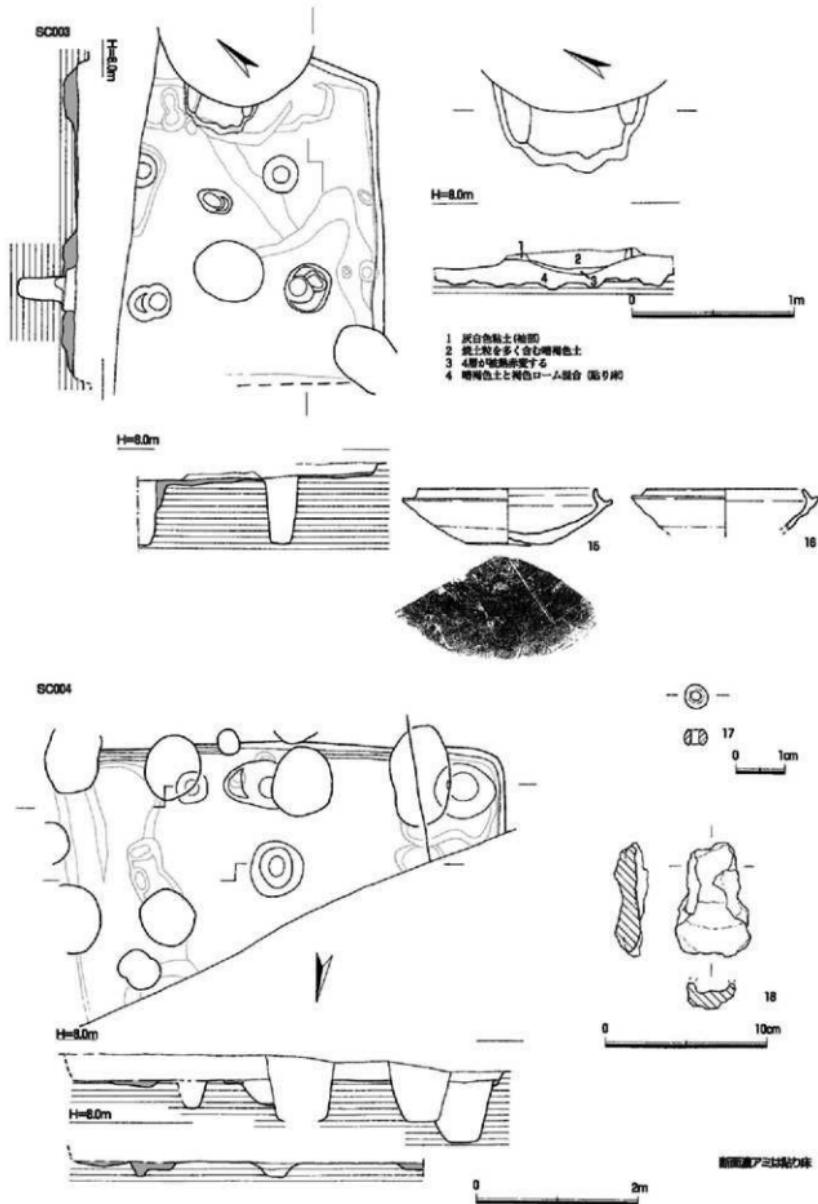


第9図 SC 002及び出土遺物実測図 (1/60、9~13は1/3、14は1/1)

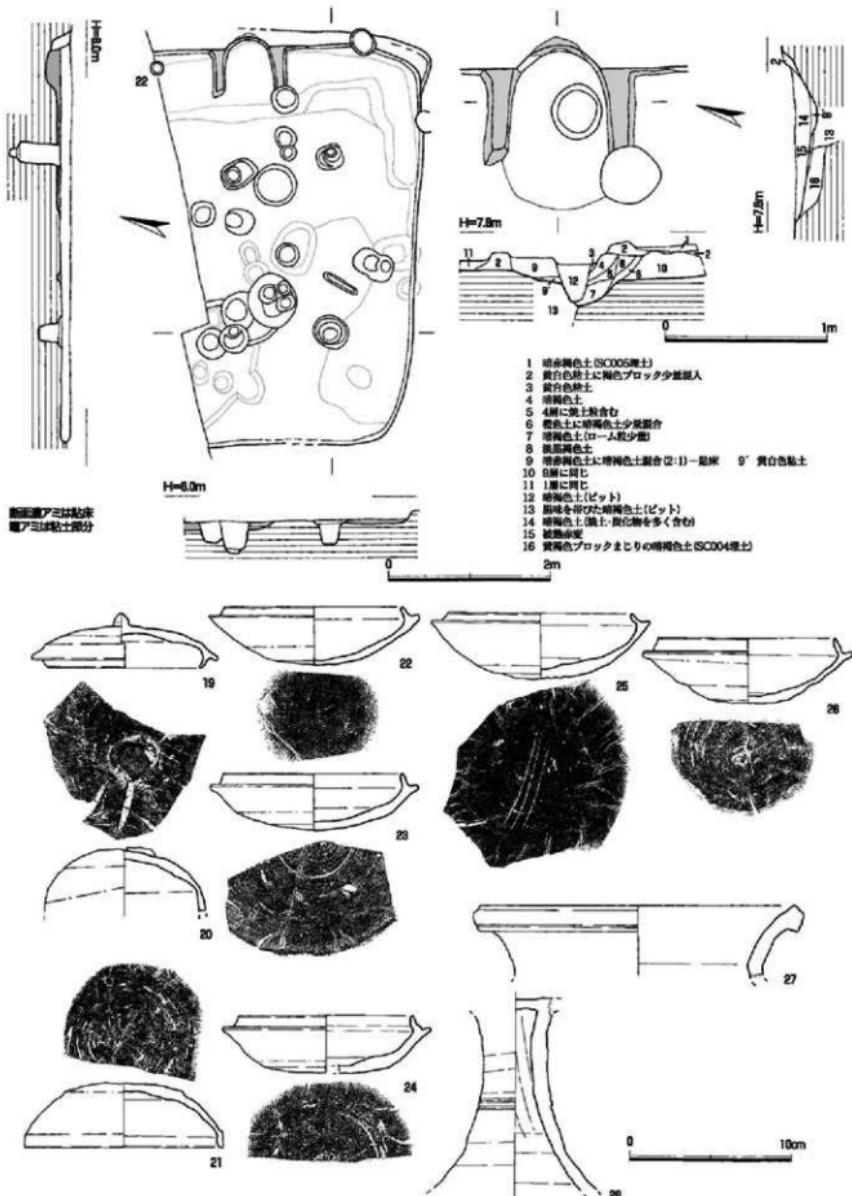
出土遺物(第9図) 9~12は床面中央部分で出土した須恵器蓋環である。いずれも外面に回転ヘラ削りを行う。13は甕である。口縁部はく字状に外反する。胴部は外面刷毛目、内面板状工具による横ナデを行う。また図示できていないが、南側中央部の壁際ピット内から内面に刷毛目を有する胴部破片が出土している。14は淡青色を呈するガラス製の小玉である。

#### SC 003 (第10図)

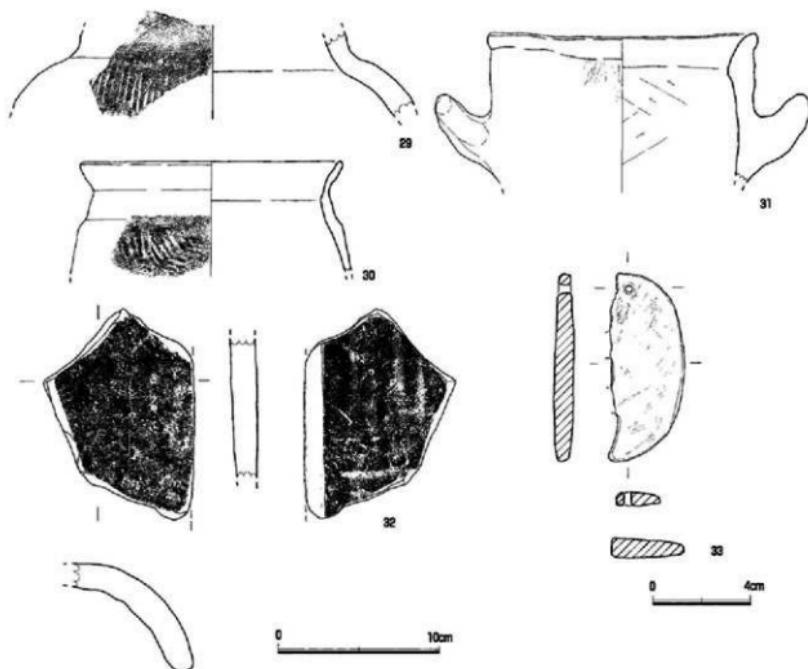
調査区東側で検出する。SC 004との切り合いが不明確で南西壁が欠失してしまったが、出土遺物よりSC 004→SC 003と考えられる。またSB 011との切り合い上の先後関係は不明であった。埋土は床面までは暗褐色土で、床面には暗褐色土とロームの混合土による貼り床が行われている。また壁高は10cm強で、住居跡の遺存状態は不良であったが、北東壁際の貼り床上面に竈の痕跡が認められた。支柱は4本で、おおよその平面形状を復元すると一辺4m前後の方形になるものと考えられる。小田編



第10図 SC 003・004及び出土遺物実測図 (1/60、1/30、15・16・18は1/3、17は1/1)



第11図 SC 005及び出土遺物実測図1 (1/60、1/30、1/3)



第12図 SC 005出土遺物実測図 2 (29~32は1/3、33は1/2)

年Ⅲ b ~Ⅳ期に位置付けられる。

出土遺物(第10図 15~17) 15・16は須恵器坏身である。外底面には回転ヘラ削りを行う。17は貼り床土出土のガラス小玉である。淡青色を呈する。

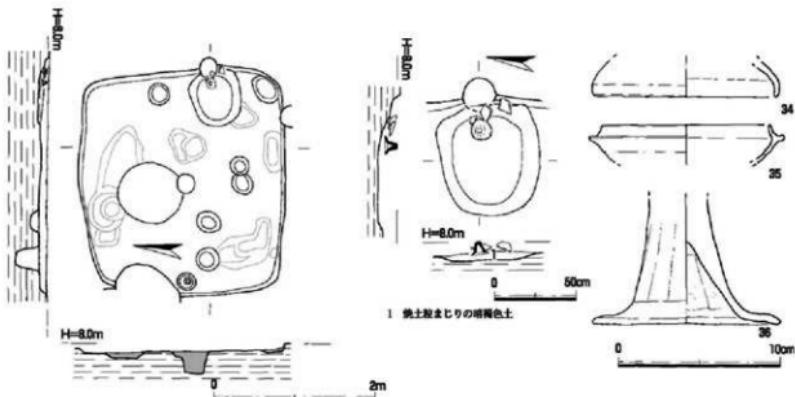
#### S C 004 (第10図)

調査区東側で検出する。S C 004→S B 011→S C 005の関係となる。埋土はロームブロック混じりの暗褐色土である。南壁沿いに壁溝が確認できる。また東西両壁沿いには暗褐色土とロームの2:1の混合土による貼り床が行われる。主柱穴は不明である。出土遺物は小破片のみであるが弥生時代後期に位置付けられるものである。また床面直上より袋状鉄斧が出土している。

出土遺物(第10図 18) 18は袋状鉄斧である。鋒化が進んでおり身部の厚み等不明である。身部は有肩状に張り出し、袋部は断面コ字状に残存している。

#### S C 005 (第11図)

調査区中央部で検出する。東壁沿いに竈を有する4本主柱の住居跡である。竈除去後にS B 011の柱穴を検出しているため、S B 011→S C 005の先後関係となる。埋土は暗褐色土で床面には暗褐色土とロームの1:1~1:2混合土による貼り床が行われる。竈部分では袖部及び煙出し壁面に黄白色粘土が認められる。また燃焼部分には被熱赤変部分が形成されている。また東壁には一度作り直された



第13図 SC 006及び出土遺物実測図 (1/60、1/30、1/3)

痕跡が残っており、改修後に20cm西にずれている。SC 008にも同様の痕跡が残されており、ここでは竈の作り変えも確認することができている。小田編年IV b期に位置付けられる。

#### 出土遺物 (第11・12図)

19~28は須恵器である。19は宝珠形のつまみを有する蓋である。天井部外面にはカキメ状に回転ヘラ削りが行われる。20・21はつまみを有しない蓋である。共にヘラ記号を有し、天井部外面には回転ヘラ削りを行う。22~26は蓋受けを持つ壺身である。いずれも外面は回転ヘラ削りを行い、ヘラ記号を有する。27は壺である。28は高壺の脚部でしばり痕が残る。29~31は土師器である。29・30は外面に擬格子叩きの痕跡が残る。31は把手付き壺である。外面刷毛目、内面ヘラ削りを行う。32は丸瓦である。摩滅が著しく調整不明であるが、凹面に横骨痕が残っている。33は半月形を呈する滑石製品である。厚さ8mmを測り、端部に1孔の穿孔が行われている。欠損部分から考えて子持ち状に突起を有するものと考えられる。

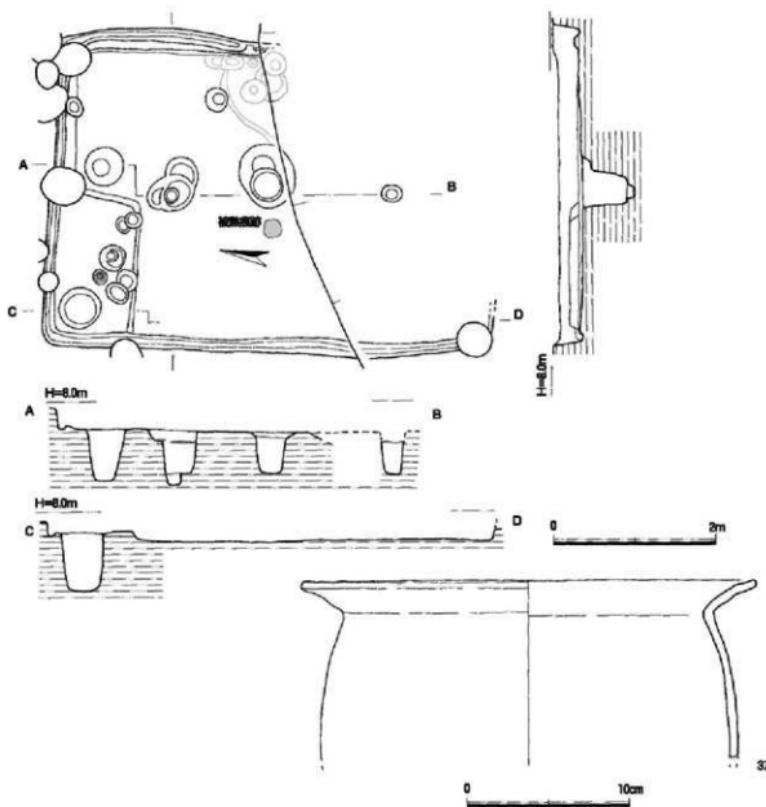
#### SC 006 (第13図)

調査区東側で確認する。平面2.5×2.8mの略方形を呈し、壁高は10cm前後である。埋土はやや灰味を帯びた暗褐色土である。東壁南寄りに竈が作りつけられている。削平により遺存状態は不良であるが、支脚として据えられたと考えられる高壺脚部が残っている。粘土は全く認められなかった。小田編年のIV期前後に位置付けられる。

出土遺物 (第13図) 34・35は須恵器の蓋環である。いずれも小破片であるが口径は小型に復元できる。残存部まで回転ヘラ削りは認められない。36は支脚に転用された高壺である。脚部外面は縦方向、内面は横方向のヘラ状工具によるナデを行う。

#### SC 007 (第14図)

調査区中央部で検出する。南側をSC 008によって削平されているが、5.5×3.9mの長方形プランを呈する住居跡である。埋土は黒褐色土である。北側短辺沿いに幅1m、長さ1.7mのベッド状造構を有し、主柱は2本で構成される。床面中央部分には径20cm程の被熱痕跡が残っているが、周辺から炭化物等は出土していない。出土遺物は小破片のみで混入と考えられる須恵器・土師器も混ざっているため時期は不明瞭であるが、形状等からも弥生時代後期に位置付けられるものと考えられる。

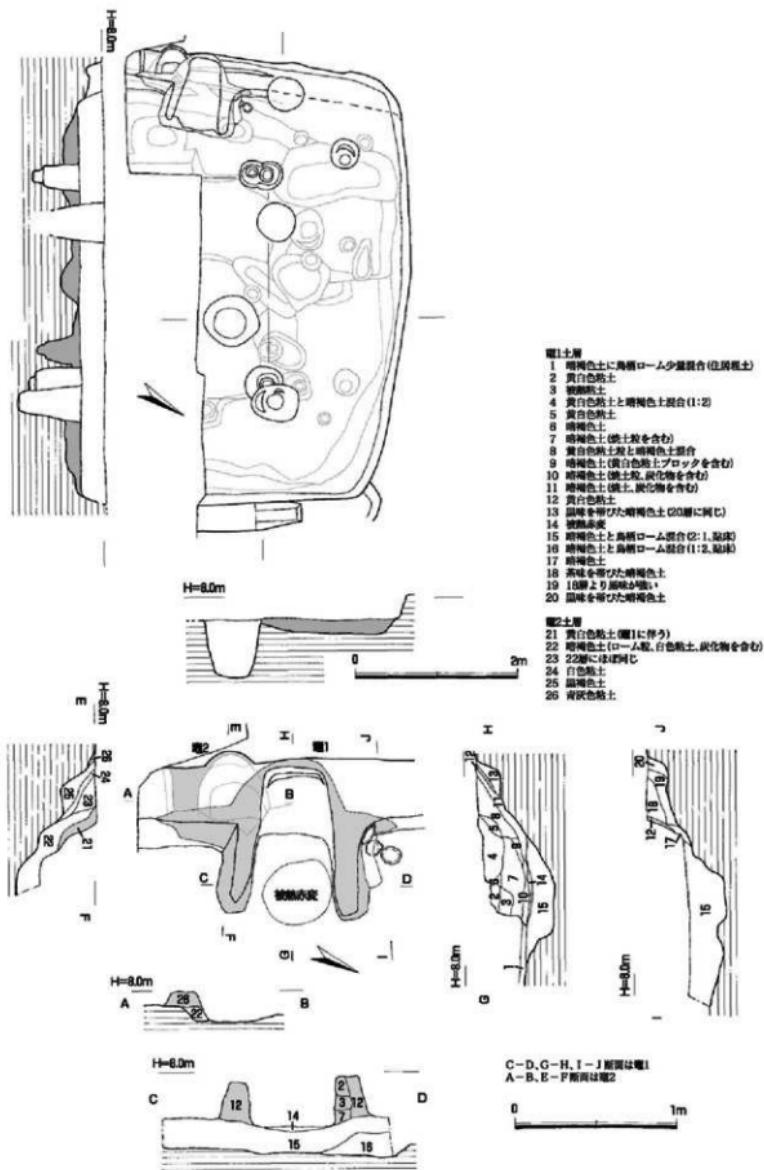


第14図 SC 007及び出土遺物実測図(1/60、1/3)

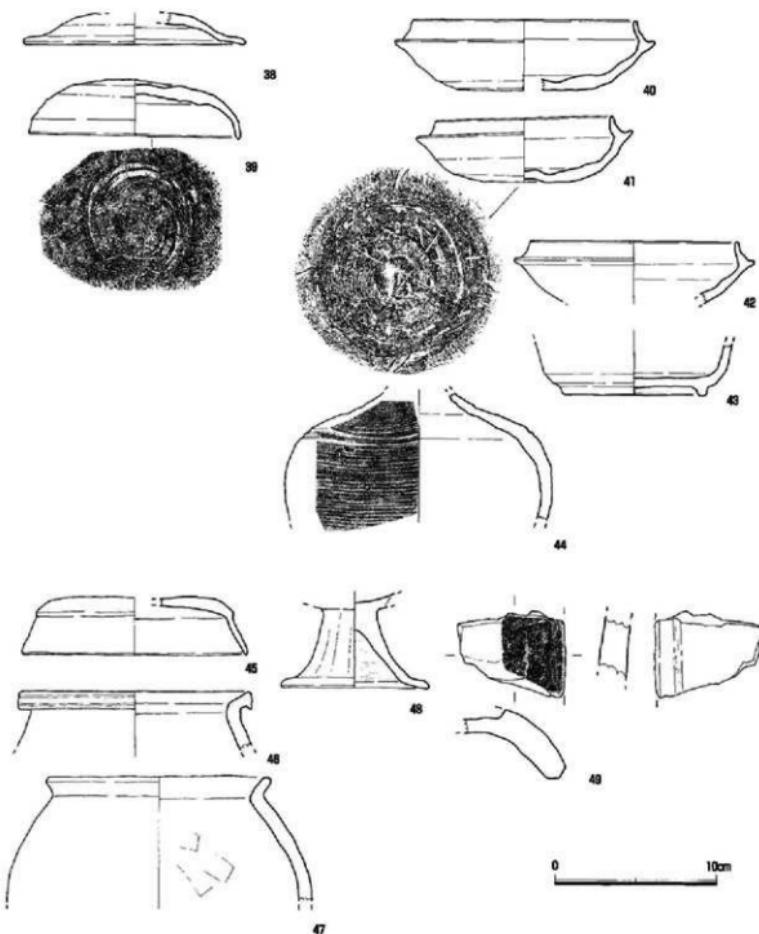
出土遺物(第14図)37はベッド状遺構上面から出土した甕の上半部分破片である。口縁部はく字状に屈曲する。摩滅が進んでおり調整不明である。

#### S C008 (第15図)

調査区中央部で検出する。埋土は褐色土で、床面のはば全体に行われている貼り床土は黒褐色土にロームブロックを混合したものである。住居規模は一辺5.5m前後の方形を呈するものと考えられる。西壁のほぼ中央部分に残存状態の良好な甕(竈1)を確認している。煙出しを屋外に伸ばすもので、黄白色粘土で構築している。また袖部分の北側外部に須恵器が据え置かれている。またこの南側に更に1基竈を確認した(竈2)。竈2は竈1に切られており、煙出し及び南側の袖部の一部分が残っている。平面及び土層観察等から当初竈2が構築され、住居の建て替えに伴い西壁部分が幅40cm程埋め立てられ、東に移動したものと考えられる。この際の建て替え後の住居西壁は竈1の袖部分から南北両



第15図 SC 008実測図 (1/60、1/30)

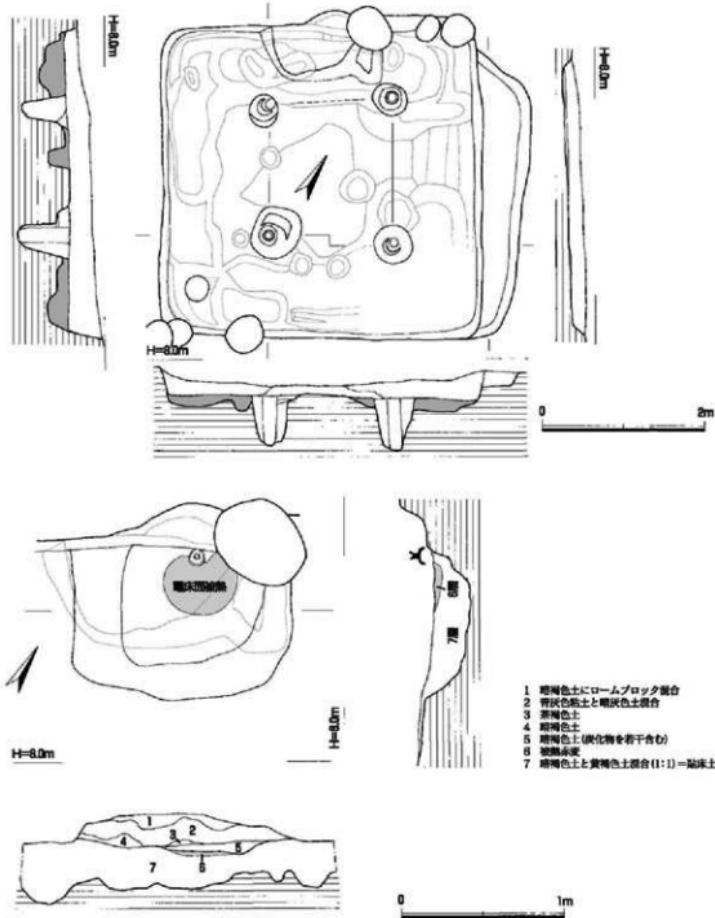


第16図 S C 008出土遺物実測図 (1/3)

方向に連続して貼り付けられている黄白色粘土によって復元することができる。なおS C 005においても同様の建て替え痕跡が確認されている。土師器・須恵器と共に瓦破片が1点出土している。小田編年IV b期に位置付けられる。

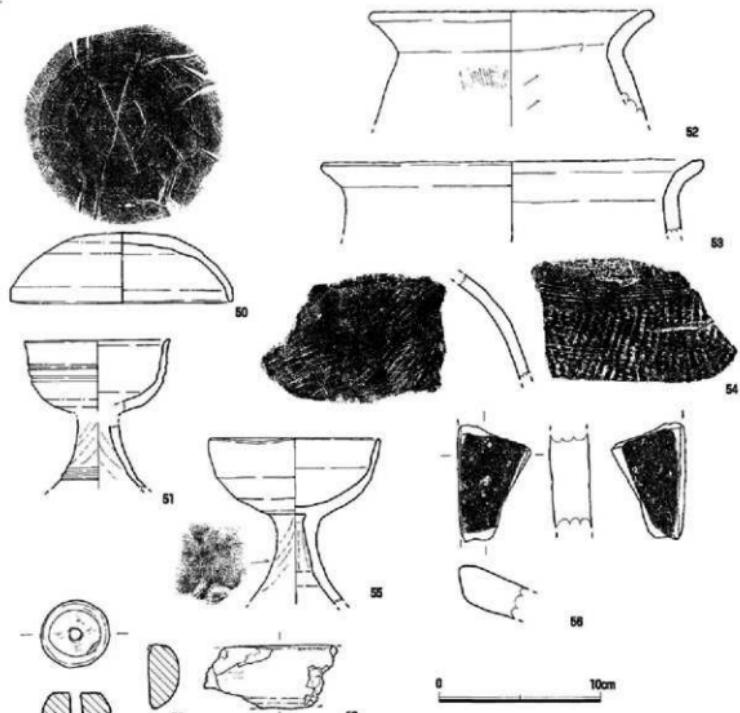
#### 出土遺物（第16図）

38~44は須恵器である。38はかえりを有しない蓋である。天井部外面には回転ヘラ削りを行う。39~41は隨處で出土した蓋環である。39は外面切り離し部分のみ回転ヘラ削りを行い、内面には当て具



第17図 SC 014実測図 (1/60、1/30)

痕が残る。40・41は坏身で、40の回転ヘラ削りは中央部まで至っていない。41は回転ヘラ削りを行い、ヘラ記号を刻んでいる。42は摩滅の進んだ坏身である。43は高台付きの坏であるが、混入と考えられる。44は蓋の脚部である。外面にカキメを有する。45～48は土師器である。45は須恵器蓋を模したものであろう。46・47は甕である。46は口縁端外面に沈線上のナデを行う。残存部分ではナデ調整を行っている。47は口縁端部を短く、く字状に屈曲させている。調整は不明瞭であるが、内面にはヘラ削り状の痕跡が残っている。48は短脚の高环である。摩滅が進んでいるが、脚部外面は面取りを行っ



第18図 S C 014出土遺物実測図 (1/3)

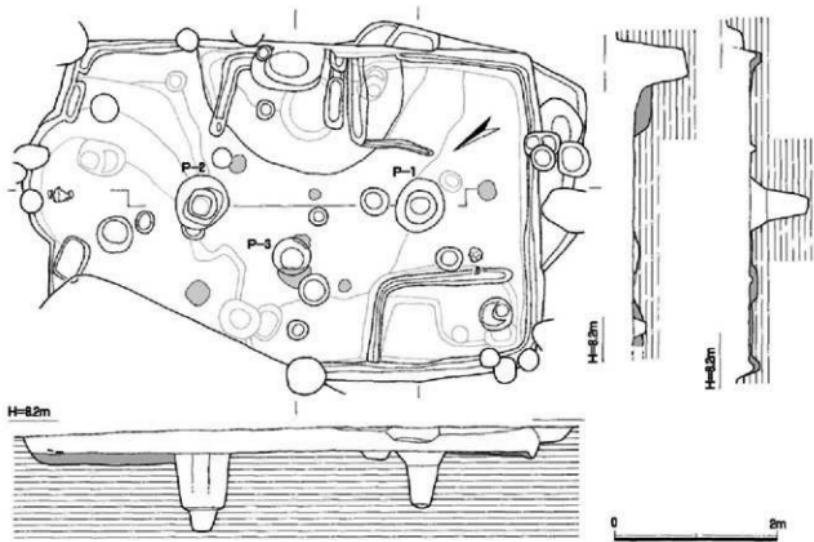
ているようである。49は丸瓦である。調整は土師質で摩滅が著しい。凸面に痕跡的に叩き痕跡が残っている。

#### S C 014 (第17図)

調査区西側で検出する。一辺3.8~4mの平面方形を呈する住居跡である。埋土は暗褐色土で、床面中央部分を除いて全面に行われている貼り床土は暗褐色土とロームの混合土によっている。主柱は4本で北壁中央部分に竈が作り付けられている。竈は破壊されており、袖部の痕跡は残っていない。粘土と暗灰色土を除去したところ、支脚となる高環が倒立したままの状態で出土し、その前面には円形の被熱痕跡が残っている。小田編年IV b期に位置付けられる。

#### 出土遺物 (第18図)

50・51は須恵器である。50は天井部に回転ヘラ削りを行う坏蓋である。外面にヘラ記号を有する。51は小型の高環である。环部には3条の沈線を有し、脚部には2条の沈線としづら痕が認められる。52~54は土師器甕である。54は胴部破片である。外面は摺格子の叩きの後カキメを施し、内面には平



第19図 SC015実測図 (1/60)

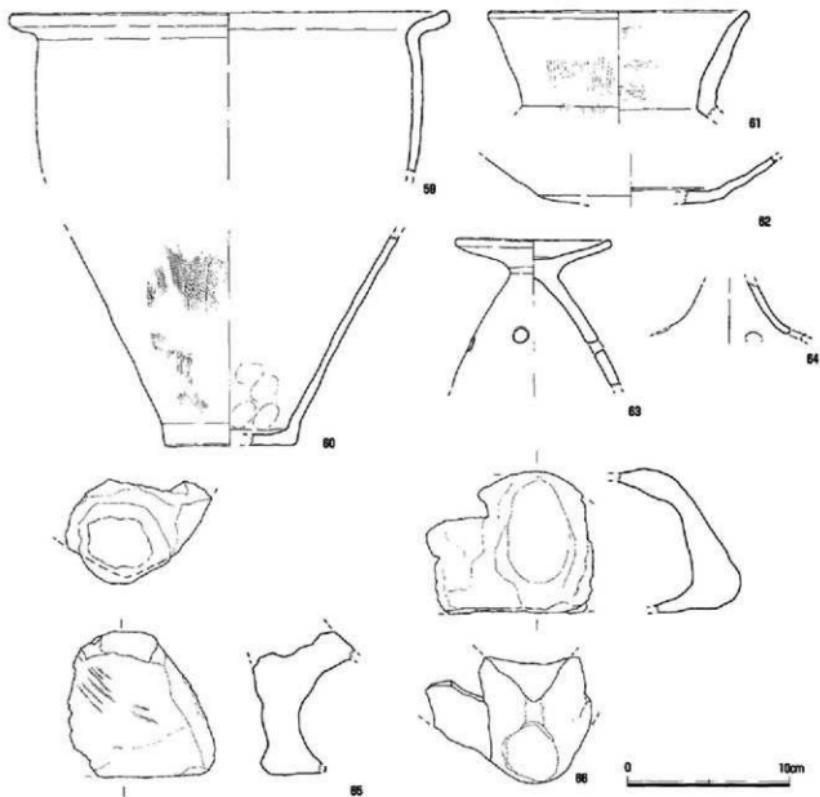
行線の當て具痕跡が残っている。55は竈内から出土した土師器の高环である。摩滅が進んでいるが成形は須恵器高环と同じ様であり、脚部にはしばり痕が残っている。56は平瓦である。焼成は土師質で摩滅が著しい。57は滑石製の紡錘車である。58は断面かまぼこ形の砥石である。全面を砥面として使用している。

#### S C015 (第19図)

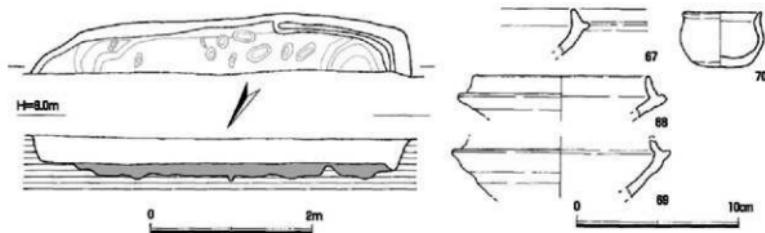
調査区西側で検出する。北側の一部をSC015によって削平されているが、比較的遺存状態の良好な住居跡である。北側壁中央部分が張り出し状に膨らむが、平面は $4.15 \times 6.7\text{m}$ の略長方形を呈する。埋土は黒褐色土で、床面に行われている貼り床土は暗褐色土とローム 1 : 2 の混合土である。北側を除くほぼ全体に壁溝が巡り、西側コーナー部分には $0.9 \times 1.7\text{m}$ の区画が行われている。また東側壁際には平面長方形のピットが掘り込まれ、その周囲には数条の屋内溝が掘り込まれている。床面にはランダムに5箇所の円形被熱痕跡が認められる。また主柱の間には浅い掘り込み (P-3) の両端に被熱痕跡の残るもののが1箇所あるが、この掘り込み中には炭化物は認められなかった。また被熱痕跡上面の土砂及びP-3内の土砂を洗浄・磁選したところ砂鉄状の遺物が20g出土している。弥生時代終末に位置付けられる。

#### 出土遺物 (第20図 59~66)

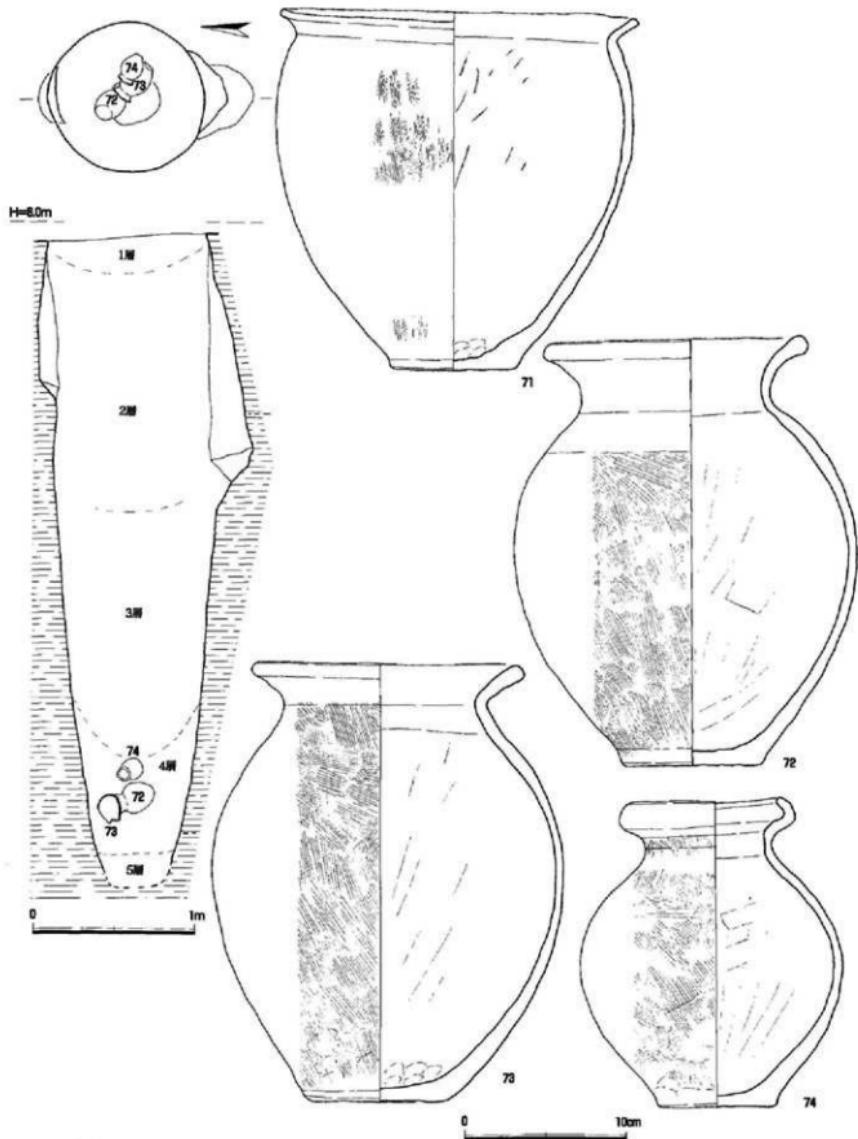
59・60は壺である。59は内傾する、く字状口縁を有する。60は平底で外面紙刷毛、内面ナデを行う。61はハ字状に開く直口壺の口縁部である。内外面刷毛目による調整を行う。62はレンズ状を呈する底部である。63は小型の器台である。脚部には現状で2箇所に穿孔が行われる。64は小型高环の脚部で



第20図 S C 015出土遺物実測図 (1/3)



第21図 S C 018及び出土遺物実測図 (1/60、1/3)



第22図 SE 001及び出土実測図 (1/30、1/3)

ある。屈曲部の下に穿孔が行われる。穿孔は4ヶ所に復元できる。65・66は体部が中空で基底面が角型をなす支脚である。同一個体の可能性も高いが、接合部分が無いため、2個体として図示している。胎土に赤色砂粒を交え、淡黄灰色を呈する。外面は2次的に熱を受け、ピンク色に発色する部分がある。調整は外面に粗い叩きが行われている。65は支点部分が剥落・分離したもの、66は後ろ側の把手部分が剥落したものと考えられる。

#### S C018 (第21図)

調査区西側で検出する。南壁のみを確認するのみで、東西長4.6mを測る。埋土は上層2/3は暗褐色土、これ以下床面まではロームブロックを含む黒褐色土、貼り床土は黒褐色土と黄褐色土の1:1混合土である。また掘り方の基底面には工具痕状の凹凸が多く残っている。小田編年IV期に位置付けられる。

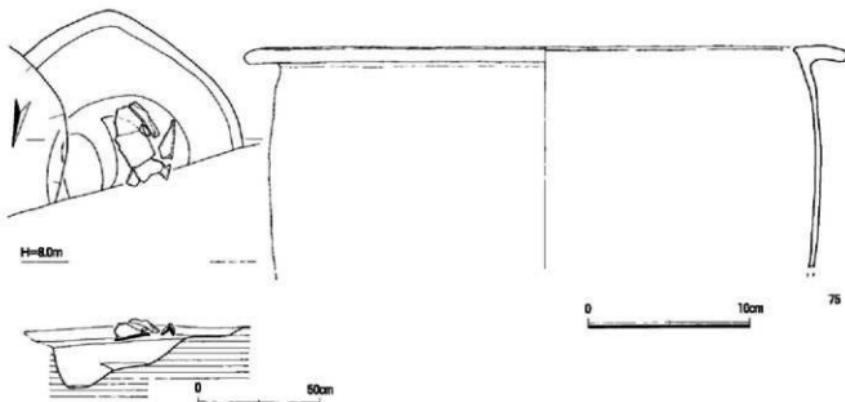
出土遺物（第21図 67～70）67～69は須恵器坏身である。69は貼り床土出土で、外面に回転ヘラ削りの痕跡が残っている。70は手づくね土器である。底面を除く外面全体に煤が付着し、底面木壁の剥落など2次的な被熱痕跡が残る。

#### 3) 井戸

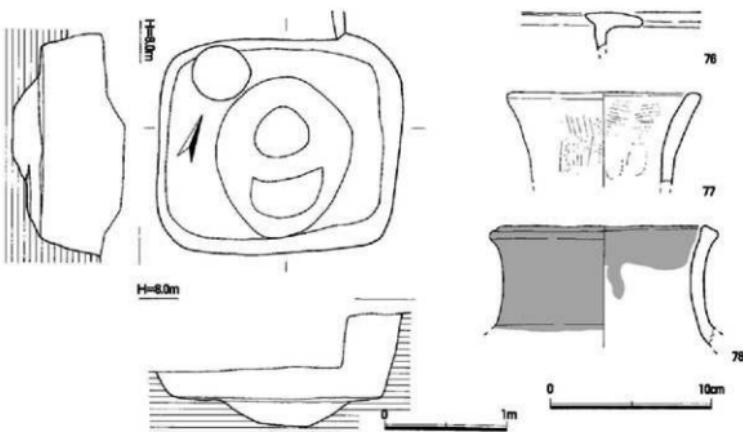
#### S E001 (第22図)

調査区東側で検出する。上面径1m弱で検出面から底面までの深さ4mを測る。南北両側壁面には足掛け状の抉り込みが2箇所に認められる。埋土は検出面～0.2mが褐色土（1層）、0.2～1.8mがロームを少量含んだ黒褐色土（2層）、1.8～3.3mが白色ロームブロックを多く含む黒褐色土（3層）、3.3～3.8mが崩落土状の白色ローム（4層）で、ここに投棄された壺が3個体出土しているが、ここではこれ以外の遺物は認められない。3.8m～底面が灰褐色砂質土（5層）である。弥生時代後期初頭に位置付けられる。

出土遺物（第22図）71は壺である。口縁部はく字状に屈曲し、屈曲部直下に胴部最大径を有する。胴部調整は外面が継刷毛、内面はナデを行っている。内面には板状工具の小口痕が残っている。底部は平底である。72～74はまとめて投棄されたいずれも平底の壺である。72・73は口縁部がハ字状に



第23図 S K024及び出土遺物実測図 (1/20、1/3)



第24図 S K025及び出土遺物実測図 (1/40、1/3)

短く開くものである。胴部外面は全体に刷毛目を行い、内面は丁寧にナデている。74は袋状口線を呈する。調整は前2者と同様、外面縦刷毛、内面ナデによる。

#### 4) 土坑

##### S K024 (第23図)

調査区中央部で検出する。土坑上面に甕上半部がまとまって出土している。埋土はロームブロックを少量含む黒色土である。掘り方は階段状となり、検出面から最下部までの深さ25cmを測り、甕は浮いた状態である。判然とはしないが、本来甕は横置されていた可能性が考えられる。

出土遺物 (第23図) 75は甕の上半部である。器面の摩滅により内外面の調整は確認できない。口縁部はほぼ水平の鋸状口縁である。

##### S K025 (第24図)

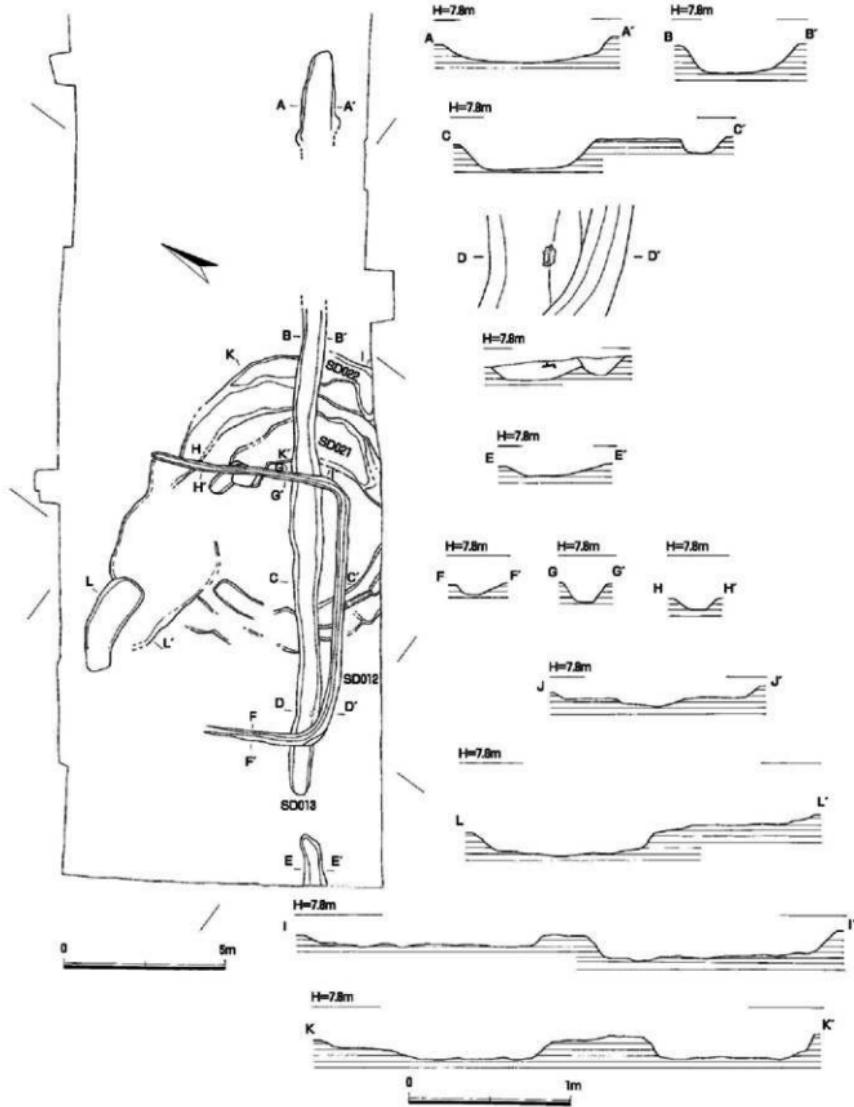
調査区西側で検出し、S K025→S C015→S C014の先後関係となる。平面1.6×2mの略方形を呈し、最底面までの深さ70cmを測る。埋土は検出面から15cmはロームブロックを含む黒褐色土、15~30cmはロームブロックを含む暗褐色土、30~50cmは黒褐色土とローム混合土、底面のビット上の窪みは黒色土ブロックを含むロームの埋め戻し土である。出土遺物には弥生時代中期後半~後期に位置付けられる甕、器台、高环、丹塗り土器等がある。

出土遺物 (第24図) 76は鋸状口縁を有する甕である。77は甕の口縁部である。外面縦刷毛、内面横刷毛を行う。78は丹塗り土器の口縁部である。頸部に突帯を有する。

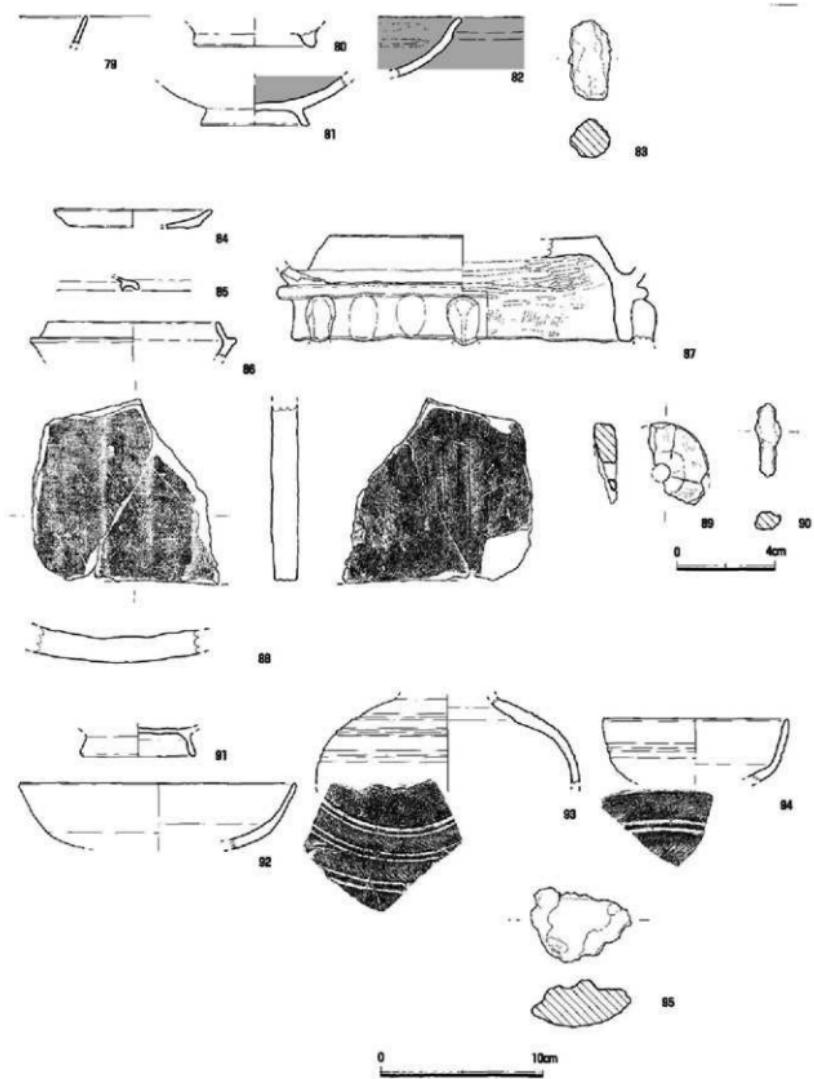
#### 5) 溝

##### S D012 (第25図)

調査区西側で検出する。現状でコ字に巡る溝であるが、北側は地山の傾斜にあわせて掘り方が自然に無くなってしまい、本来は北側も囲んでいた可能性が考えられる。主軸方位はN-22°-Wになり、囲む範囲は東西8m、南北6m以上である。掘り方は幅30cm、検出面からの深さ10cm前後を測る。断面はU字状を呈し、埋土は褐色土である。建物等の施設に関連する溝と考えられるが、範囲内に掘立



第25図 溝実測図（全体図1/150、断面図1/30）



第26図 S D 012・013・021・022出土遺物実測図 (79~88・91~95は1/3、89・90は1/2)

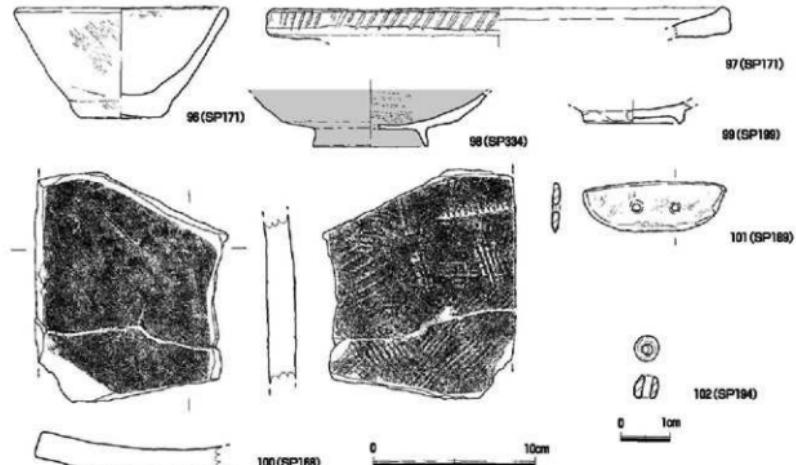
柱建物等を確認することができなかった。古代後期（10世紀代）に位置付けられる。

出土遺物（第26図 79～83） 79は越州窯系青磁碗小破片である。釉調はオリーブ灰色、胎土灰白色を呈する。80・81は内黒の黒色土器A類楕である。82は両面黒化処理した黒色土器B楕である。出土遺物はいずれも摩滅が進んでおり調整等は不明瞭である。83は断面円形を呈する棒状の鉄製品である。錆化が進むがメタル度はLで遺存状態は良好である。

#### S D013 (第25図)

調査区南壁沿いに、これに沿って検出した溝である。平面的には S D013→S D012の関係となる。一部分途切れている個所があるが、ほぼ連続した直線溝であったと考えられる。東側で立ち上がり途切れるが、本来的には更に延伸しているものと考えられる。主軸方向はN-62°-Eである。断面は浅皿状を呈し、埋土は灰褐色土である。埋土中には流水を示すような堆積は見られない。出土遺物は少量で、84の土師器皿を除いて古墳時代後期に位置付けられる土師器・須恵器小破片がほとんどであり、高台付きの器種が認められず、陶磁器類も出土していない。また瓦が数点出土している。しかし褐色系の埋土であることや S D012との切り合い関係などから9・10世紀代の遺構と考えておきたい。なお獸脚覗が1点出土しており、これとの関係で考えると、本調査地点の西側50mの地点に台地中央部を真北に縦断する直線溝が掘削されている。7・8世紀代の遺物を主体とし、瓦が満遍なく出土する溝である。可能性の一つとして関連を考えておきたい。

出土遺物（第26図 84～90） 84は土師器皿である。摩滅が進み調整は不明である。混入品と考えられる。85は須恵器蓋である。86は蓋受けを有する須恵器坏身である。87は須恵質の獸脚の多脚円面鏡である。海陸部の1/4が残存する。鏡面部は研磨によって滑らかとなっている。また海陸の境は明瞭な稜を成し、海底の幅は狭い。外堤部は大半が欠損しており、その高さについては明らかでない。外堤下には張り出しを有し、鏡基底部に至る。張り出し以下鏡基底部外面に獸脚を貼付している。現状では2脚のみが残存しているが、間に2脚貼付されていた痕跡が残っているため、およそ1.5～2cm間



第27図 その他の遺物実測図 (96～101は1/3、102は1/1)

隔で脚が貼付されていたものと考えられ、復元すると19脚となる。また基底面以下の脚据部分は欠損しているため、全体の形状は不明である。硯体外面には回転ナデの痕跡が残っているが、内面には静止状態でのナデ痕跡が明瞭に残る。また外面の張り出し部以下に対応する内面部分は板状工具での削り、刷毛目状の痕跡が残っている。また硯面海陸の稜線付近に接合痕が認められる。胎土には1~2mmの石英砂粒を多く含む。本製品は硯部下部外面に脚を貼り付ける多脚円面硯の手法をとるもの、外堤及び下の張り出し部の接合方法やこれ以下の硯基底部分に通有よりもさらに多くの脚を貼付する点など、形態的にも製作法の上でも蹄脚硯的な様相を帯びたものとなっている。88は焼成土師質の平瓦である。凸面は縦方向のナデを行い、凹面に布目が残る。89は滑石製の紡錘車である。90は棒状の鉄製品である。

#### S D021・022 (第25図)

調査区西側で検出する。黒褐色土と褐色土が混合する埋土で、平面的な輪郭が不明瞭である。歪んだ円形を描くが、北西側ではくぼみにたまたまのような状態で同様の埋土が広がっている。新しい時期の耕作痕跡である可能性も考えたが、S D012・013に切られていることなどから溝状の造構として取り上げておきたい。遺物は少量黑色土器・土師器等が出土しているが、大半は小田編年IV期に位置付けられる須恵器、土師器である。性格については不明である。

出土遺物 (第26図 91~95) 91は黒色土器Aの椀である。92は土師器壺である。外底面はヘラ削りであろうか。93は須恵器壺で沈澱間に刺突文を有する。94は須恵器壺である。屈曲部位に刺突文を有する。95は椀形鍛冶津である。2段に形成されている。

#### 6) その他の遺物 (第27図)

96は椀である。外面縦刷毛、内面ナデを行う。97は壺の口縁部である。口縁端部外面に施文を行う。98は内面黒化処理した椀である。99は白磁碗で、高台外面まで施釉する。100は平瓦である。凸面叩き、凹面ナデを行う。101は石包丁で、孔芯間で2.3cmを測る。102は淡青色を呈するガラス製小玉である。

#### 7) 小結

ここでは簡単に時期ごとの変遷を述べてまとめに変えたい。出土遺物の上では弥生時代中期後半代～終末期および古墳時代後期の2時期の遺物が主体を占め、これに古代～中世前半代の遺物が少量含まれるという構成をとっている。検出遺構もこれにしたがっている。

弥生時代中期後半にはS B027・029に見られるような比較的大型の掘立柱建物による集落が形成されている。これにやや後出する井戸 (S E001) 等、続く後期の段階には竪穴住居跡群 (S C002・004・007・015) により、集落が構成されているようである。

布留式土器に代表される古墳時代前半代の造構・遺物はほとんど見られず、後期になって大規模な集落が形成される。周辺の調査事例からもこの時期には特に生活造構の検出量が激増しているようである。まず切り合い関係からS B011・030の掘立柱建物が先行したと考えられるが、時期的にはほぼ間断なく、この後4本主柱で竪を有する定型化した竪穴住居群 (S C003・005・008・014) が形成されている。S C008に見られる様に竪の作りかえも行われている様である。

古代後期～中世前半代は溝状造構・柱穴を検出しているが、特に建物は拾い上げることができなかった。またS D013より出土する獸脚硯については、本来の溝の時期よりは古い遺物であると考えられるが、非常に注目される遺物である。

おおよそ以上のような変遷をたどるが、この傾向は本調査地点北側の鞍部を隔てた第8・69次調査、南側の第32・34・62次等に見られる変遷状態と類似している。特に北側部分とはほぼ同一の状況をたどっている。今後の調査により更に詳細な復元が行われることを期待したい。



写真1 調査区東半部全景（西から）

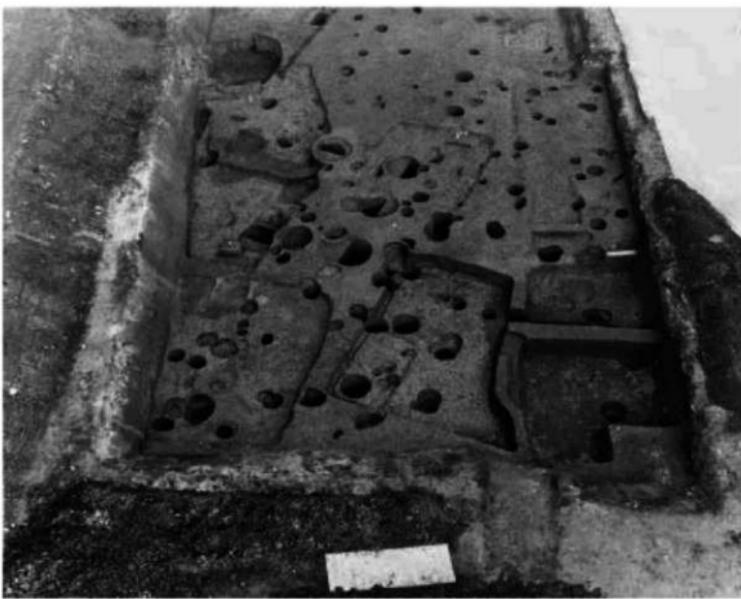


写真2 調査区東半部西側（西から）



写真3 調査区西半部全景（西から）



写真4 調査区西半部中央（西から）



写真5 SB 011（東から）



写真6 SB 011（南から）



写真7 SC 002（北から）



写真8 SC 002（東から）



写真9 SC 003（南西から）

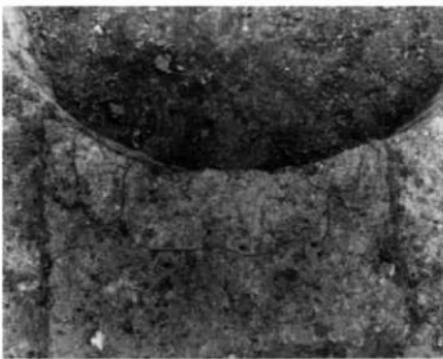


写真10 SC 003検出状況（南西から）



写真11 SC 005（南西から）



写真12 SC 005縫（南西から）



写真13 SC 005縫土層



写真14 SC 005縫土層



写真15 SC 006（西から）



写真16 SC 006縫（西から）

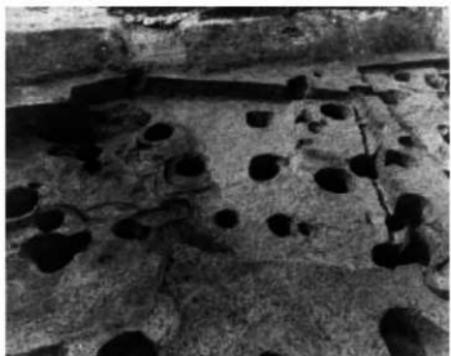


写真17 S C 007（東から）



写真18 S C 007（南から）



写真19 S C 008（南西から）



写真20 S C 008毫検出状況（東から）



写真21 S C 008毫（東から）



写真22 S C 008毫（東から）

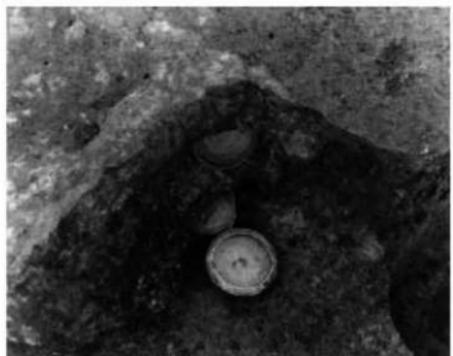


写真23 S C 008 窓袖部北側遺物出土状況（北から）



写真24 S C 008 窓 1 土層（G - H）

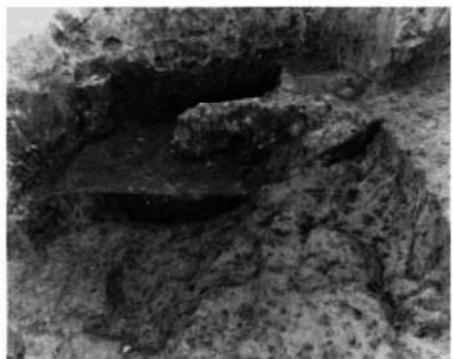


写真25 S C 008 窓 1 土層（G - H 完掘後）



写真26 S C 008 窓 2 土層（E - F）



写真27 S C 008 窓 2 土層

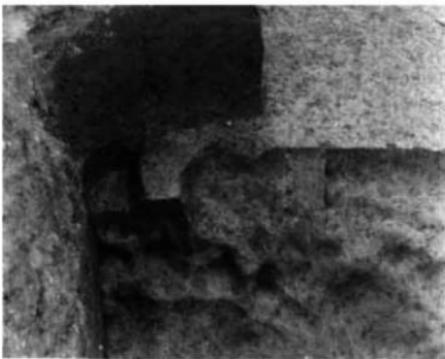


写真28 S C 008 窓 2 完掘状況（東から）



写真29 S C014・015（南西から）



写真30 S C014（南東から）



写真31 S C014窓土層



写真32 S C014窓内高坏出土状況（南東から）

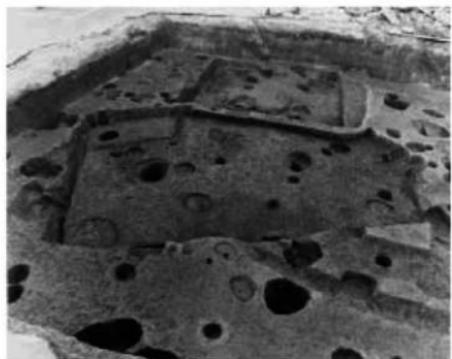


写真33 S C014・015（東から）



写真34 S C015壁際ビット周辺（北西から）



写真35 S C 018（東から）

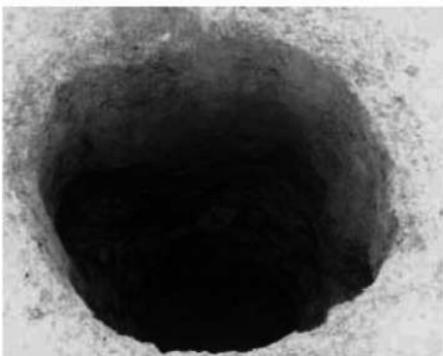


写真36 S E 001（東から）



写真37 S E 001遺物出土状況（北から）

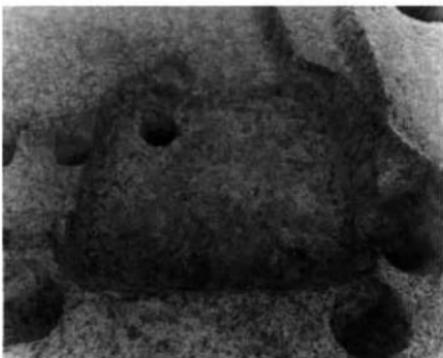


写真38 S K 025（南から）



写真39 S K 024（東から）

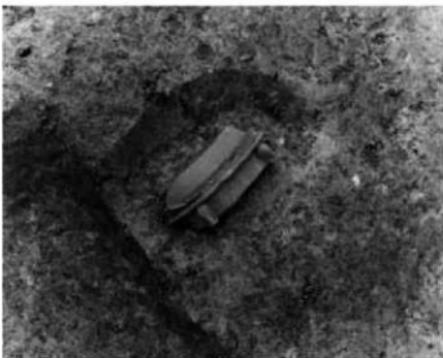


写真40 S D 013遺物出土状況（北から）

書名ふりがな なかさんじゅうろく  
書名 那珂36  
副書名 -那珂遺跡群第86次調査報告-  
卷次  
シリーズ名 福岡市埋蔵文化財調査報告書  
シリーズ番号 802  
編著者名 長家 伸  
編集機関 福岡市教育委員会  
発行機関 福岡市教育委員会  
発行年月日 20040331  
作成法人ID  
郵便番号 810-8621 電話番号 092-711-4867  
住所 福岡市中央区天神1-8-1  
遺跡名ふりがな なかいせきぐん  
遺跡名 那珂遺跡群  
所在地ふりがな ふくおかし はかたくなか1ちょうめ 550ばん  
遺跡所在地 福岡市博多区那珂1丁目550番  
市町村コード 40132 遺跡番号 37-0085  
北緯 33°34'44"  
東經 130°26'6" (世界測地系)  
調査期間 20021205-20030219  
調査面積 370  
調査原因 共同住宅建設  
種別 集落  
主な時代 弥生/古墳/古代  
遺跡概要 集落 弥生-住居5+建物2+井戸2+弥生土器+小玉+袋状鉄斧  
古墳-住居5+建物3+溝1+須恵器+土師器+滑石製紡錘車  
古代-溝2+須恵器+土師器+瓦+青磁+黒色土器A類  
特記事項 9~10C代の溝から獸脚鏡が出土する。

## 那珂 36

-那珂遺跡群第86次調査報告-

2004年(平成16年) 3月31日

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷 株式会社 三協会印刷所

福岡市東区箱崎ふ頭6丁目6番40号